

# 玉城素著

## 『玉城素の北朝鮮研究 金正日の10年を読み解く』

晩聲社, 2009年

本書は、著者玉城素が金正日時代に発表した北朝鮮政治、軍事、外交、経済問題などの論文を主に、新に「市場経済」論文を執筆、付け加えたものである。構成は第1章「朝鮮式社会主義の破綻」、第2章「軍主導国家の変身」、第3章「金正日10年の経済」の3部作。第1章、第2章は総書記金正日（以下金正日）による最高権力の形成分析で、総書記就任が父金日成時代の「朝鮮式社会主義」の決定手続きとは無縁な「変則政権」、「異常権力体制」であることを論証している。そして金正日政治体制が核開発、ミサイル発射などの「先軍政治」、つまり戒厳令体制という強権政治によってしか維持できないことを、「党総書記」、「国防委員会委員長」などでの推戴過程、「3紙共同社説」、「最高人民会議」などの分析からくり返し論じている。

評者が最も教えられた部分は第3章「金正日10年の経済」の解明である。玉城は北朝鮮社会主義経済シンボルである配給制の崩壊、総人口の10%程度ともされる大飢饉惨状、その結果として人民が市場経済制を産み落とされねばならなかった危機経済情勢や背景などを具体的に検討する。読者は肝臓癌で他界する直前まで、玉城が考えていた北朝鮮の政治経済世界を知ることが出来よう。パソコンに残されたこの玉城遺稿は、日本語で書かれた北朝鮮市場経済問題に関する最上級の分析ではあるまいか。

評者が本書を含めて玉城素の北朝鮮研究で驚嘆させられる点は、実証分析に基づく先駆的業績である。例えば、朝鮮戦争問題を扱った「日本における朝鮮戦争観」（1967年刊 コリア評論社『朝鮮戦争史』所収）は、当時の日本知識社会で圧倒的

に信じられていた「米、韓による対北朝鮮侵攻説」に対して、本格的反論を加えた数少ない研究論文である。その翌年68年には『金日成の思想と行動』（コリア評論社）という大部な専門書を刊行したが、怒濤の如く進行する金日成神格化の中で、「特定の党派、個人が真理と権威を保持する考え方…、プロレタリアート思想をイデオロギー化することに反対する（まえがき）」と正面から論じて、金日成思想、つまりチュチェ思想の一色化運動に対して理論的に批判し、その後起きてくる韓国や在日などの「金日成思想批判」の先鞭となった。1978年には大部な『朝鮮民主主義人民共和国の神話と現実』（コリア評論社）を出版したが、圧巻は北朝鮮政府が65年から一切の中央統計発表を中断する中で、玉城は恣意的宣伝物や建設実績数字などを一々、批判的に検討して、北朝鮮経済の実像を刻んだ画期的な研究書となった。北朝鮮経済が第1経済（政府）と、軍需関係の第2経済に分断されていることは今日、常識だが、この点を論理的に指摘した研究者は玉城が嚆矢である。

玉城は敗戦直後から2高（その後東北大）の日共キャップとして党活動に関与した。20代後半には山村工作隊員として「武力革命」に関わり、やがて東北地方農村などに潜んで在日朝鮮人のアジトなどを転々とした。そしてコミンフォルムや日共中央などの身勝手な方針で翻弄される在日朝鮮人の戦後活動を、自己の戦後体験や党活動と重ねて綴った「日本共産党の在日朝鮮人指導（61年発表）」（『民族的責任の思想』所収、御茶ノ水書房、67年刊行）を発表したが、この論文は玉城が北朝鮮問題に手を染めるに到った内的契機を語ってくれるだけでなく、戦後の在日朝鮮人運動

が日共とどのような関係であったのかを物語る貴重なドキュメントである。

玉城は、冷戦終焉後の北朝鮮体制に関して「崩壊問題」を最も体系的、論理的に主張した研究者である。そのエッセンスは『北朝鮮破局への道』（読売新聞社、1996）に詳しい。事実、金日成が造りあげた「北朝鮮体制」は基本的に崩壊した。計画経済は瓦解し、配給制度も消滅した。北朝鮮社会主義の一大成果と喧伝されてきた教育、医療などの無償化制も崩れた。北朝鮮の最高権力機関

である朝鮮労働党活動は、人民と権力を繋ぐ朝鮮労働党総会、中央委員会大会、政治局などに現れているようにマヒ状態を継続している。こうして北朝鮮体制は物理的力が支配する先軍政治に変質したが、玉城はこの金正日政治権力に対する最大の挑戦勢力は市場経済グループと捉えて、他界直前まで北朝鮮情勢の現状分析に専念してきたことは既に述べた。「玉城素は日本が生んだ前人未踏の自前の北朝鮮研究者」と評する所以である。

（花房征夫 東北アジア資料センター）